

の中で、「私の研究方法は若いときからあまりかわっていない。」とおっしゃった。進歩がなかったとひかええめにおっしゃったお言葉を、私は「先生の今日の学風の基礎は若くしてすでにできていたのだなあ。」と感銘深くうけたまわった。

「余生の許す限り、私は奮起して、自己の学問を充実させねばならぬと思う」（国文学叢考の序）と記された先生に、天はその余生を許してくださらなかった。

大きな星が突然光を消したように、先生は突然おなくなりになった。悲しみの中にあつて、折々にお話しくださったお言葉をいくつか記して、私は先生をお慰び申し上げることとした。（昭和三十二年七月大学院卒、京都市教育研究所員）

後藤先生を偲ぶ

松井 松太郎

後藤家には先生の長逝を伝えきいて駆けつけられた親族縁者の姿がぼつぼつ見え、若い僧侶が静かに読経しておられ、先生は万巻の

書の間埋れて安らかに瞑目しておられた。親しみ深いその童顔は平常とかわらず艶艶しておられるので、枕頭にすがつて勉強不足をおわびしたかった。先生は岩波書店の日本古典文学大系の著述に寝食のいとまをも惜しんで没頭されていたから、出版を一日も早く完成されるまでは決してお邪魔してはいけなさと、一人ぎめしていたので、きつと甚だ不勉強になったものと思召しておられたかも知れぬ。こんなに急逝されるのが天寿であられたのならば、もつとしげしげと御垂訓を賜わりに御伺すべきであつたものと口惜しまれる。先生は常になく眼鏡をはづしておられ眼窩に強く眼鏡のあとが残っていた。日頃温和であられた御気性も、真理を追求されようとするときは文学の鬼だ。あの眼鏡の底から叱正された学生時代を思いだす。叱られることがなければオーソドックスの道は何事でも成就しがたい。学部入学早々の演習に兩月物語序文解があたり、教壇に上つてぎこちなく語るのをにこにこ聞いておられた先生は、後刻に誤れる点を指摘され冷汗三斗の思いがしたが、これが先生に叱られはじめだった。爾来、原拠出典資料をみつづける度ごとに鬼

の首でもとつたように先生宅の門を叩くのだが、根拠のない妄説はすべて通じない。誉められるような事は十に一つだ。或る時、秋成の雅号について「桐一葉散つて天下秋也」を秋成が何かに引用しておりますから、この言葉が気に入って、自ら秋成と号したのでしようと思ふに上ると、論拠不十分としてしりぞけられるといった具合なのだ。又、ある時、知人の子が専門部を受験するにつき、成績が悪いので是非入学させて頂きたい旨を御願してみると、自分の力で受験して下さいとおっしゃつて、この時ばかりは先生の楕円形の眼鏡が四角に化したと思われる程、厳正なお気持を示されまして、はじめて先生の真価に接した気が致しました。卒業論文諮問会では、先生から、主論文より副論文（二百枚）の方ができていると評していただいたが、叱られたことの大きな部類に属するものであろう。さて、私は商家の長男、家業を継いでゆかねばならなかつたので、先生より助手に残るようお言葉を賜つた時には、眼がしらが熱くなる程嬉しかったが、運命にさからわなかつて、今は染物屋のあるじ、本の読みたい時には、えてして十露盤をはじかね

ばならぬ。さいわい先生の御同情を蒙つたものか、江戸時代の文学者の中には商人が多く、秋成を筆頭に京伝・馬琴等の名を繰返されて、どんな境遇にあつても学問し研鑽しとげることが大切だといわれたことはたびたびであつた。子供も出来て白髪もふえた。幾才になつても学生時代に受けた先生の御教訓が、事あるたびに思い出されては、今さらのように胸をうつ。先生にはもつと延寿していただいて、叱つて、もらいたかつた。私はこれから先いゝんな失敗をすることだろうが、先生に叱られるべき事がたくさん残つてしまつたように思うのだ。(昭和二十五年三月、自家営業)

後藤先生の思い出

森 本 修

後藤先生は、昭和二十九年七月に本学から大阪学芸大学へ御赴任になつた後も、引續いて非常勤講師として学部、大学院へ御出講いだいでいたことや、お宅が近い関係もあつて研究室へお出でになることが多かつた。先生の出講日は、いつか金曜日と定まつてい

た。そして、毎週金曜日講義を済まされた後、研究室に寄られて新着の雑誌類に目を通され、しばらく雑談をしてお帰りになつた。几帳面な先生は、出講日以外に研究室へお出でになる時には、事前に必ず私の在室時間や都合を尋ねてからお見えになつたものである。日本古典文学大系の仕事にかられるようになつてからは、そうしたことが数多くなつた。鞆の中から厚い草稿の綴りを取り出されて、必要な本に目を通されては「これはよし」とか「よし」とか、低いが力強く独言されて書き込みをされていた姿が目の方に浮ぶようである。そして、仕事を済まされると例の如く雑談をされた。雑談の内容も、私が近代文学を専攻している関係からか、先生は近代文学に関することを多く話題にされた。また、先生が大阪学芸大学へ御赴任になつて創刊された「学大國文」が刊行される度に、わざわざ足をはこんでこられて、一冊ずつ特徴のある先生の字で「謹呈」とか「××様」とか書かれたのを頂戴したものである。昨年十一月初旬、「今から研究室へ行く」という電話があつて、先生が研究室からお持ち帰りになつていた図書をかなり多く返却に

こられたことがあつた。その大部分は、古典文学大系「椿説弓張月」の執筆に必要あつてお持ち帰りになつたものであつたが、中には先生が本学に在職中に借り出されたものもあつた。その時は別段なんとも思わなかつたが、先生がお亡くなりになつた後、先生が余所から借り出されていた本について土岐さんと調べてみたところ、先生が研究室から借り出されていた図書はこの時全部返却されていたのである。

先生が研究室へ最後にお出でになつたのは、四月十九日であつた。その日、大学院の講義をお済ませになつた先生は、研究室で雑誌に目を通された後、皇学館への通勤の話や芝居の話など、いつになく話し込んで帰られた。次の週、二十六日は大学院の講義は御病気のため休みであつた。五月三日(金曜日)は祝日で休みなので、十日にはお目にかれるかと思つていた矢先、五月二日朝、出勤した私は先生急逝の報に接した。

十余年の間、学生として、また助手としていろいろ御指導いただいた先生についての思い出は尽きない。今は研究室におけるありし日の先生を偲び、御冥福をお祈りする次第で